

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和2(2020)年
11月号

通巻603号
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

★発行日 令和2年11月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷 監修
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



奈良公園の丸窓の家 みんなの広場「らんまん」(大和郡山市) 松下広実さんの絵

昭和41(1966)年11月23日 月次祭法話より

神ながらの秘法 ——いつの間にか自然に——

法主 矢追日聖 (満54歳)

勤労に感謝するよしみ

勤労に感謝する、こんなことは平素我々が生活する中で考えたことがあるでしょうか。

勤労には、勤めるとか働くとか、そんな意味持たせているんでしょうけど、本当の感謝というのはやはり健康に対してだと思っただけです。

勤労という意味は、我々が現実生きておるといふことを指して言っておると思っただけです。あながち会社で働くとか、野に出て肉体を使って仕事をやる、そんなことだけではない意味があるように思っています。心の働きもあり、肉体の働きもあり、みんなと仲良うやっついでいこうという働きもありますね。お互いに調和をとっていこうという一つの力、働きがなければ調和はとれないんですし、そこまで考えると勤労という意味は非常に範囲が広いと思っただけです。

秋の十一月二十三日を祝祭日として決めたのは、一年の稲作が実り、お百姓さんが稲刈りをし、新しいお米を皆さんにお供えし、また我々がいただくということを動機として、「勤労感謝の日」ということになっておるんだと思っただけです。

そういうのは日本宗教と結び付いている行事でございます。仏教とかキリスト教とかそういうものと比較して日本の宗教という言葉を使うんですけど、農耕という仕事全部が宗教的行事となっております。

日本の宗教といつもの

我々が日々こうして生きさしてもらってるとい
うのも、これはもう神さんと人間が共に生きてる
んであって、人間だけが勝手に生きてるんじゃない
んだと。神さんと人間が非常に身近な関係にお
いて、日本はやってきたはずなんです。

だからして、お米を蒔くのも、稲を刈るのでも、
人間がやるんですけれども、半面神さんが手伝っ
てやってくれてるんだと、人間と神さんが一緒に
仕事をしておるとい感じ方です。取り立ててこ
れが日本の宗教であるというようなものはありま
せんけれども、日々の生活そのものが今の我々の
感覚で言えば宗教的な生活の仕方であり、宗教的
な行事であるんです。

あるいはご飯一つただくんでも神さんと共に
いただく、我々人間だけが勝手に食うんじゃない
と、神さんと共にいただく。その神さんというの
は、私は現代の言葉を使って、霊界の人々、霊界
人と言います。それを、昔の人は神さんという名
前で扱っているわけなんです。そういうような
神さんとは、いつも手をつないで共に生活して
おる、共に仕事をしておる。

一年を伺う

霊界における人々は、現界における私たち人間より
も見通しが利くんですね。それで百姓の人は一月
一日になると、氏神さんにお詣りする。お宮さん
というのがその住み処なんです。宮という言葉の
「み」というのは靈魂とか心、「や」というのは
入れ物、家屋ですね。肉体を持っておる現界人が、
霊界人の住んでおる所に寄り集まるわけです。

それで、今年一年はどういう方法で稲作をすれ
ばいいだろうか、今年は何が多いとか、虫が付く
とか、日照りやとか、そういうことを霊界人に伺
う、お尋ねするんですね。

伺うには、神がかりのような方法とか、あるいは
物でもって占いをする。例えば、まだ十五、六
歳くらいの子なんかが昔よくやったんですけ
ど、目をつぶって棒を持って神さんにお祈りす
ると、必ずから手が動く。そんなやり方で棒が右に
出てくれば日照り、左に出てくれば雨が多
いとかね。そうすると、今年は雨が多いからこうせな
あかんとか、日照りやからどうせなあかんとかね、
正月のはじめに、みな神さんに伺う。

昔の人は神さんと言ったんですけれど、私は
霊界人と言って区別します。

私は天地自然の力を「加美さん」と呼んでい
るんです。形のあるもんじゃなしに。例えば地球と
か創っていく、宇宙の現象界の最初に出てきた宇
宙の一つの力、今の言葉で言えばエネルギーとい
うことになるんですけどね。電気でもみなエネ
ルギーですから。そういうような根本の力、偉大
なるエネルギーのようなもので一切が支配され、変
化していくんです。そういうものを総じて加美さ
ん、加美さんの力と私は言ってるんです。こんが
らがるって言う場合もあるんですけどね。

生活そのものが宗教的行事

日本の古代というのは、だいたい二千年かそれ
以前ですけどね、日々の生活そのものが宗教的な
生活、何一つするのも宗教的な行事だったんです。
子供が一人出来たら、神さんから授かった。そ
れでもう、神さんと人間が結び付いている。おめ
でたいから餅をつく。その餅を人間が食べるんじ

やなく、まず神さんの所に持って行くんですね。
子供が出来たということと神さんということがも
のすごく接近してるんです。人間だけの行事じゃ
ないんです。

家を建てる場合でも、神さんがおられる土地を
借りるんやから、一番先に祝詞をあげるとか、お
祓いをするとか、その土地の神さんと人間がまず
親しくなるんですね。私は家を建てるので堪忍し
て下さい、よけて下さいということです。その神
さんというのは人格神ですね。

もし家を建てて崇りがあったら怖いとか、今で
も言いますが、もともと誰かがここにおったか
もしれん。だから拜んで、塩まいて御幣でもって
祓い清める。清める範囲は、縄張って青竹立てて
御幣ぶら下げて、人間がこれだけの範囲を使わせ
てもらいますから、神さんちよつとよけて下さ
いとお願ひします。何をしても全部、神さん
いわゆる霊界人と人間とが一つやった。

昔の人たちのご飯食べる時に、箸で少しつま
んで、これはご先祖さん、これは山の神さん、こ
れは川の神さん、これは野の神さんと、それぞれ別
々に供えて、それから自分がいただくんですね。
そういうようにご飯を食べるんでも、神さんに
先上げる。今やったら仏壇のご先祖さんに上げ
るとか言うけど、同じことなんです。仏教とい
う形を取ってるだけで、心は自分の先祖さんに持
っていくんやからね。

御利益信仰

日本の神ながらの宗教は、どれが宗教かと取り
上げて言うことはできないんです。経典というも
のはありませんし、教えというものもありません
し、言葉でも通じませんし、何もありません。

ただ形として、家の中の生活においてずっと流れてきたのが、日本の宗教なんです。

私は、現代の生活の中でも、これが必要やと思うんです。今はこうした科学文明になって、昔の農耕文化の社会と違っていぶん変わりましたけど、そういうような心の持ち方、状態は、現在の皆さんもいつも持ってほしいと思うんですね。何一つするんでも人間だけやなしに、霊界の人たちとも常に一緒なんだと。

今の日本に仏教もあり、神道もあり、キリスト教もあるんですけど、何か経典とかバイブルが教えるの中心になっている。キリスト教にも信仰の対象がありますし、仏教の場合なら阿彌陀如来や釈迦如来、薬師如来、菩薩、天とか、そういうものを信仰の対象に決めておいて、それに対してお経を上げたり手を合わせたり拝むということが、我々が幸せになる道やと、一般にはそういうような教え方が多いと思うんです。

結局、自分というものの能力、自分というものの反省を忘れてしまつて、身近な周囲に共に生活している霊界人のことにも鈍感になつてしまふ。自分と木仏金仏を相対して、そこに一つの距離を作つて、仏さんは偉い人やから、這いつくばつて拝んでお経上げて、その力を借りて幸せに生かしてもらおうということです。

これは別に悪くないんです、構わないんですよ。けれども、それで幸せになれると思つていると、哀れやから注意するだけで、そんなものではめつたに幸せにはなれないんです。

こいつはよう拝むから手伝つてやろうとか、こいつは信仰せんからケツかまそうとか、それだつたら欲の深い人間根性であつて、皆さんでも仏さんでもない。

ほんとの神さんや仏さんであれば、拝む人にだ

け御利益をやる、拜まん者にはバチ当てるというような不公平、不平等な取り扱いは絶対しないんです。

それを、一生懸命に拝んだ者、一生懸命に信仰する者には御利益があるというように教える人が現在はずすぎます。また、そう言われると我が自身の得する話ですから、欲の深い人は、その話を信じるんです。乗っていくんです。例えばわずか百円の賽銭あげて、何百万円も儲けさせてもらおうという根性なんです。欲が深すぎる。

そういう者が神さんに手を合わせてお経上げて、それで御利益あつたら、相手は魔神でしょう。ほんとの神さんと違ふんです。悪くはないですよ。その人が拝んでおつても悪くはない。その代わり、一生の間に、その裏が出てくる日がいつか来るんです。

自分の心が自分を治す

この神さんを一生懸命に信仰したら必ず家が都合よくいく、病気が治りますと言つたとして、そりや一生懸命になつたら治るんです。ということでは、神さん仏さんが病気を治してくれなくても、自分で自分を治せるんです。例えばこの肥たごが、私の病気を治してくれるんだと、信じ切つて毎日拝んでごらん、治るんです。そういうような場合もあるんです。

神さんそのものは、拝んだから助けてやろうとかそんなんでなく、ただ、自分が病気を忘れてしまふくらい集中することが出来たら、たいていの病気は治るんです。そういうように自分で一生懸命信仰して、自分で治してる場合もたくさんあると思います。

それでも信仰したから、拝んだから神さんが治

してくれると喜んで。喜びを持てるということが結構なことですがね。

それでみんなが治るかというのと、そんなもん、半数以上は死んでしまうんですよ。それでも、治つた人の宣伝が功を奏しますから、どうしても御利益信仰の根は絶ちません。治つた人の話が世間に広がつていって、治らんで死んだ人の話は消えていく。そういうような動きでもって御利益信仰はだんだんと栄えていくんですね。

でもね、いつかは、泣く日がくるんですよ。そんなものは神さんの法でもなければ何でもないんですからね。いつかは裏が出てくる。仮にこの神さんを拝んで商売繁盛したと思つて、一生懸命神さん神さんと信仰していたら、しまいにガツチャンと損する日が来る、それは決まつるとるんです。

自分というものを忘れて、神さん仏さんの力を借りてうまくいこうと、そういうようなずるいことを考えとつたら、天の法は許しません。必ず裏が来ます。

けれども世間の宗教はそういう方向に行きつつあるから、それをひっくり返さんと、絶対だめなんです。みんなが不幸になつていきます。

そんな神さん仏さんに頼らないでも、自分の肉体はお宮さんですから、このお宮さんの中に鎮座しておる自分のほんとの心、加美さんからもらつた心があるんですよ。それをみんなが一人一人、自分の肉体の中に大事に守つておるんです。だから、自分の加美さんを一番大事にしないといけないんです。

その加美さんに力を出してもらつたら、肉体は都合よくいくし、生活環境もうまくいくんです。自分の加美さんをおろそかにしておいて、別の木仏金仏に拝んでみたり、よその神さんを頼みに行つたりしたら、大間違いなんです。

自分の「加美さん」の修養

自分の加美さんは、宇宙の大加美さんから分かれたもので、あなたたちみんな持つておるんやけど、出所は一つなんです。みんな天地自然の大加美さんから分かれた小加美さんを肉体の中に持つておるんです。小加美さん同士が集まっているんやからね、みんな兄弟であり親類であり、自分の家族であるんです。

ところが、自分の持つておる加美さんをおろそかにして、よそばかり見ておれば、人と争い起こるわ、仲悪くなるわ、家の中乱れるわ、思うようにはならんわと、不幸になっていくんです。

自分の加美さんを大事にして、修養させていくには、まず人や周囲に過多に頼らないことなんです。お互いに力になつてもいい。協力し合うのはいい。みんな力になり合う方がいいんです。けれども、頼つてはいけないんです。自分からおつかぶさつていくようなのはね、最もいけない。

自分の加美さんを一番大事にお祀りする。その方法は、いつも言う禊ぎとすることです。禊ぎというのが、自分の加美さんに力を与え、磨き上げる、唯一の方法なんです。

禊ぎということは、何回もお話ししてまますけど、一番身近なことで言えば、朝、目が開いて寝るまでの間に、仕事をしていても、あるいは何をしておつても、常に自分の心を振り返つてみる。自己反省してみることで。周囲の人にも心があるんですから、その心と心の結びつき、調和していくということ、それを常に考えたいと思うんですね。

自分の心は、天地自然の分かれが肉体に入っているんですから、自分の心を天地自然の心に通じるように、五分でも三分でもよろしい、じつと自己反省する、自分をかえりみる。「かえりみる」ことが、「考える」ということ、「神に帰る」ということなんです。

それを一日に一回ないし二回、常に天地の加美さんと共にあるという気持ちで、自分を振り返つてみる。これが怠りないということ、拜むということでもあるんですね。

浄化されていく霊波長

言い換えると、御利益下さい、病氣治して下さい、家の中を都合よくいかして下さいと、要求を持つて神さんに頼むんでなしに、黙つて一人で、

自分の心の中で、自分の心と宇宙の大加美さんの心を接近させていく、ということ。それは何も意味がないんですよ。それでもいつか知らない間に、自分たちが幸せになっていく。訳も分からず、けれどもそうやっていくんです。

これが神ながらの秘法ですね。その心でおれば、具体的には言えませんが、自然に家の中が、いつか知らん間に都合よくいくようになっていく。これが非常に面白いところなんです。

こうして皆さん方が、月に一回集まる。そうするとあなたたちの関係の先祖さんもみんな来てるんです。それが言葉でなしに無言の中で、心と心が霊波長の中で、お互いに結びついている。そこには、清い美しい波長もあれば、汚い波長もあるんですが、みんなその中で浄化されていく。

黙つて座つておつても浄化作用を裏でやっておるんです。そうなつてくると、先祖さんも喜ばれるし、人もよくなつてくる。何かしら、自然にいつのまにか知らん間に家庭の中が万事うまくいくというように、望まない御利益が来るんです。望んで御利益が来るというのはだめなんです。こういう雰囲気もまた、禊ぎと云うんです。

今日はこの辺にしときます。

(文責・編集部)

「神通力如是」の真意をさぐる

第十回

大倭教の源流にさかのぼつて

じんずうりきによぜ

今回の原文の冒頭部分は、前回(第九回)「十一月十日 午前八時、於鳥見庄山」の後半部分とかなり重複します。あえてそうしたのは、原文のはじめで奇稻田姫が法主に「日聖ヨ」と名指しで語りかけていることに、より深く注目しなければ

ならないと考えたからです。

奇稻田姫は法主に対して、今の日本は闇であるが、この闇を切り開いて正法を立てる役目があると説くのです。奇稻田姫のこのお言葉は、昭和20年8月15日の終戦の日に法主に与えられた「大倭

教で立て」という神示に呼応するものだと思うられます。

今回は、読者の皆さんのさらなるご理解をいただくためにも、あらためて三人の会としての解釈を加えた原文の現代語訳を註釈の後に載せること

にしました。
それに加えて終戦の日の神示を受けて、その日に法主が綴って奉納した「立教開宣文」を参考資料として載せ、当時の法主の決意を理解するための一助としたいと思います。

原文

合掌

「吾レハ、奇稲田姫

日聖ヨ、ヨク承レ。吾レコノ世ニ於テ
妙法トナヘ、シンノ正法立テル役目、亦
タ殊ニ因縁ノウズモレ玉ヘル代々君、題
目トナヘ、陵墓ノ確定、明カニセヨ。

我ガ日本ハイマ闇ナルゾ。コノ闇ヒラ
キテ皇孫ノ安ラケク、平ラケクオサメル
ヤウ、マチカニ迫リシ今日ノ代ニ心カラ
ノシンノ題目トナフルモノ集リテ、大倭
トビノモリ、^①悪魔怨敵退散ノ祈願ヲイタ
セ。今コノ天上ニテモ諸天善神ミナコ
ゾツテ、真ノ題目トナヘルゾヨ。トモニ
国タミ心ヨリ、心ナルモノ集ヒキテ真ノ
題目トナヘヨォー。前ニハベル倭姫、神
楽ソウシマイラセヨ」

「倭姫、有難キオウセ、拙ナキワザニテ
候ヘドモ、オンマヘニテソウシ奉ル」ア
アーア 題目、
「大八洲嶋、中津島根ノ日ノ本ハ、吾ガ

皇孫ノ君タルベキ地ナリ。何ノ怨敵クル
ルトモ、諸天善神加護ニヨリ、国家安泰、
大稜威、竹ノ園生ノイロマシテ九重オク
ゾー 栄エマツラムー。ナムミヤウホ
レンゲキヤウ
今ハ国ヲ挙ゲテ皆ミナコゾリ、総動員
ノ命ガ下リシゾー 題目。ミナミナ心ヲ
合セ各々業務、カノツツク限リ勵ミイタ
セ。ヒマアル時、オン題目七字トナヘ、
国家武運長久ノオ祈ヲイタセアレ。其レ
ガ真ノ題目ゾー 題目」
奇稲田姫命「倭姫、ナガナガ御苦勞デア
ッタ。吾レモ、トモニ題目トナヘ奉ル、
ミナミナトモニ唱ヘヨウー」
倭姫 「フツツカナルワザ、オン前ケガ
シマイラセ、アリガタキオ言葉チヨウダ
イ仕リ、倭姫、厚ク御礼申シ奉ル。吾
モトモニカノ限リ国家安泰、武運長久、
祈リマイラセ候。ナガナガノオメザハリ、
オイトマ仕リマス」

註 釈

①天上ニテモ

大倭太(た) 加天(かまの) 腹(はら) ニテモ
怨敵クルルトモ

怨敵: 怒みのある敵(岩波書店『広辞苑』による)
クルルトモ 法主ご自身がルビのところ
注として二文字めのルに(ウ?)と記されてお
り、来ルルではなく狂ウともとれる。

ここでは「怨敵がどのように無茶な狂った所業
をなさうとも……」と解したい。

③大稜威(おおみいつ)

天皇の威徳。稜威。天皇、神などの威光。強い
御威勢。(岩波書店『広辞苑』による)
大倭聖歌「くにもと」四番に「祖神の大稜威」
の歌詞があるが、そこでの「大稜威」は加美か
ら注がれる恩恵という意味である。

④九重オクゾー

昔、中国の王城は門を九重に造る制度があつた
ところから、皇居や都のことを指す。(岩波書
店『広辞苑』による)
オクゾーは、定めるの意。

⑤総動員

ある目的のため全員をかり出すこと。(岩波書
店『広辞苑』による)

この神語りが行われている昭和16年11月には、
日中戦争に際し、人的および物的資源を統制し、
運用する広汎な権限を政府に与えた「国家総動
員法」が13年に公布、施行されている。(岩波
書店『広辞苑』による)

⑥国家武運長久

「武運」とは戦いにおける勝敗の運命のこと
であり「武運長久」とは良い武運が久しく続くこ
と。(小学館『日本国語大辞典』による)

現代語訳

奇稲田姫 合掌 私は奇稲田姫です。
日聖よ、よく聞きなさい。

あなたには現界において人に先立つて神ながら
の法を説くお役目があります。

先ずとりわけ「日本の歴史から抹殺されている
(法主の言)」神武以前の代々のスメラミコト達

の实在を明らかにしなさい。

いま、日本の国は闇であります。この闇を被い皇孫(すめらみこと)が安心して平和に治められる国になるような時期が直前にきている(原文では「マジカニ迫リシ今日ノ代」今日です。このような時期に、心からなる題目を唱える者達が集まって大倭神宮で悪魔怨敵退散のための祈願をしなさい。今この霊界においても、真の題目を唱えます。顕幽にある国民よ、心こもる者達よ、真の題目を唱えなさい。

私の前にいる倭姫よ、神楽を舞いなさい。
倭姫 有難いお申し付け、私のつたない業ですが、奇稲田姫さまの前で舞いましょう。あーあーあー題目。

いくつかの島が集まる国(日ノ本)は、我が皇孫が治めるべきところですよ。
この地(国)を侵し闇にしている悪魔怨敵が、どんなに無茶な狂ったことをしても幽界におられる高位の霊人達の加護によって皇孫の治める地は安泰であります。

この加護によって宮中も竹が育っていくように、榮えて行くでしょう。そうするために題目を唱えます。

現在の日本は(現人神としての)昭和天皇の命により国民みんなが総動員法(昭和13年)のもとにあります。

そんな中、国を害する悪魔たちを退散させるために題目を唱えます。

国民みんなは心ひとつにして、日常のつとめに励みなさい。そして暇ある時には七字の題目を唱え、皇孫の治めるべき国の安全と平和を願い、そして国を守るお祈りをしなさい。それが真の題目を唱えていることになるのです。

奇稲田姫 倭姫よ、長時間ご苦労でした。

私も共に題目を唱えましょう。皆さま共に唱えなさい。

倭姫 私倭姫のつたない舞で御前を汚しました。有難いお言葉をいただき有難うございます。倭姫も皆さんとともに、精一杯に国の安泰と国の守護をお祈りいたします。

長時間のお騒がせ、これにて失礼いたします。

現代語訳の補足

今回の本文にある「マジカニ迫リシ今日ノ代」

立教開宣文

敗戦後の日本、神国なるが故に武器は消えた。世相は乱れて秩序なく、人心恟々として明日の安心を求む。宗教は地に墮ちた。だがその残滓のみ大空に聳えて、瞬間的享楽を、或いは芥箱に生命の糧を漁って歩む社会大衆を、冷たき眼で見送っている。

日聖は立つ、既成宗教の墮落は日聖を立たしめた。六合の中心地、嘗て和の光を放てる金鷄発祥の霊地大倭に、日聖は神が与え給う使命に不惜身命にて精進する。

中心より生まれる中心の教えが金鷄の如く世の闇を照らす東方の光となるであろう。大倭教は神のまにまに刻々転化の途をたどって動くことと信ず。

現世を憂うる若人よ!! 日聖と生き、日聖と死せんとする情熱の男女よ、あらば来たれ、ともに世界平和の捨石となろう。主義に生き、主義に死のう。日聖さきかたり、若人よ続け!!

世界平和の鍵は日本に在り、日本の中心は大倭に、大倭の中心は日聖の肚に在る。黎明は訪れたり昭和維新、五十年、百年後の歴史が日聖の使命を雄弁に物語るであらう。

昭和二十年八月十五日

日聖

敬白 拍手

奈母太加天腹

足あと
足あと

遠い昔のように思える 大倭のご縁とその後

大阪市 金澤 秀光

大倭とのご縁は、凡そ30年位前になりますでしょうか。筆者が鍼灸院を開業して間もない30歳過ぎのころで、ちょうどそのころ原因不明で実弟の顔面が引きつって困っていたのです。

実妹、金靄子がすでに大倭とご縁が繋がっており、妹の発案で一度家族(母・妹・弟・筆者)4人で法主様にご相談しようということになったのがご縁のきっかけです。そして大倭に向かおうとした朝の出かける間際に、実家の博多人形の首が飛んだのでした。一同、これはただならぬことが起きてるとびっくりしましたのであります。

車で何とか大倭神宮にたどり着き、土塀の脇に車を止めて歩いてるその時、筆者の心臓が突然ドキーン!としようざいたのを覚えています。後に、土塀の中のその場所に奇稲田姫様がお祭りされていることを知り、なんとなくご縁があるのかな?と漠然とその時感じました。

法主様と初めて机を隔てて向かい合いました時、法主様はニコニコされながら指先で机をトントンと叩いて「こら、こんなことしたらあかんがな」と優しく語りかけられたのです。

何が起きてるのか分からないまま、法主様がお話を続けて「これはなあ、正一位の霊力を持つてる狸の神様でなあ、四国でお祭りされてたんや。家のどこぞにお茶を一杯供えて、仲よろしいたらええ。そやな、名前はくろちゃんにしようか。このくろちゃん、お金儲けが上手いから、誘われ

ても乗ったらあかんで」、そう言つて弟の後ろ首のあたりを指で×と十字を切つて終わり。帰宅して弟の背中を見るとカミソリで切つたように×が付いていたので、本当に驚きました。

その後神戸の震災の折にはこのくろちゃんに、何度も何度も弟に「ホルモン売りに行こう。行って焼いたらえらい儲かるでえ」と声をかけられたそうですが笑つてやり過ごしていたとのこと。その後、弟は結婚して家を持つようになったのですが今でもくろちゃんはどつやう一緒に居るようで、しばらくくろちゃん存在を忘れてると玄關の鈴が鳴るので、それと知るそうです。

母親は、初めて法主様に会つた時の印象を「なんや知らんけど、えらいなつかしい感じのする人や」と何度も語っていました。筆者の法主様の印象は、お顔はいつもお会いする度に笑つておられるのですが、その目の奥にえたいのしれない(失礼!)何かを感じてまして、なんかえらい空恐ろしかったのを覚えております。以後法主様のご逝去され、お見送りに行ったのを機に、筆者は次第に足が遠のいておりました。ですが忘れようとしても忘れられない何かがずっと筆者の心中にありまして、うまく表現できないのですが心の中だけでも生きてるのです。

その後筆者が39歳の折、突然十二指腸潰瘍穿孔という病で病院に担ぎ込まれたレントゲン室で数人の医師から、胃の内容物が腹腔内に出るので緊急手術しますと言われたのです。

激痛で何本もモルヒネを打たれて朦朧とした意識の中で「なまたかまのはら」と言つてる自分が居たのです。するとはつきりと聞こえたのです。「漏れてるのは、そのへんだけやで」という声だ。

「だつたら手術しなくて良いではないかと思ひ、医師にその意向を伝えると「君、死ぬで」と

言われ、それでも意思を曲げないでいました。医師は何も処置をしないでこのまま死なれると、病院が困るのやと言われまして、それならショック状態になるまでこのままにしておいてくださいとお願ひしまして、いつでも手術のできる状態のまま集中治療室で経過観察して頂きました。

その間、不思議な夢を見たのです。姿は見えなかったのですが意識の左手に女性が居られて、とてもやさしく語りかけられるのです。「今回のあなたの人生での選択は…中略…帰つて来てもいいけれど、またしなければなりませんよ。今までもそうだったでしょう」

その時に初めて死のうとして居る自分が居ることを知つたのです。そして家族に対する自分の思いが尽きて意識が遠のくその瞬間、「何をしに、この世に来たんやろ?」つて思つたのです。そしてそのことが何をさておいても一大事と思えたのです。そして何をしにこの世に来たのか分からなのまま、この世を去るのは寂しいな…:そう感じて意識が遠ざかり、目が覚めると医師が筆者の顔を上からのぞぎ込んでいたのです。手術をしないで退院したのは、筆者が初めてのことでした。

それから以後、自分探しを始めたのですが60歳を過ぎた今となっても「何をしに、この世に来たのか?」が分かりません。そしてあの時の女性が誰だったのか、何をしにこの世に来たのかを、出会つた数多くの霊能者に尋ねましたが、誰も明確に答えてくれませんでした。それはきつと目の前の現実を、唯生きることなのだろうと最近思ひ至つてます。法主様のように使命を自覚して厳しく生きられた人生。筆者のように使命が何なのか今以て迷いながら生きてる人生。

与えられたこの世の人生を生き切つて、帰幽してからやつと分かるのでしょうか、きつと。

あじさい日記

10月15日 大倭神宮の月次祭。
10月23日 大倭大本宮月次祭。
昭和41年10月23日月次祭の法

話をお聞きしました(本紙未掲載かも)。また教長さんは大倭殖産(株)の社長を退任し、代わって杉本朝順さんが就任したとのお話がありました。

10月28日 元紫陽花邑住人の菅野弘子さんが帰幽されました。
平成28年5月号「寸沙」に登場、昭和14年生まれで満81歳でした。



10月30日 交流の家コンサートが中止となり、中川五郎ライブは奈良市内の「みりあむ」で入場者20人限定で行われました。

11月2日 佐渡の故平田弘之さんのご家族(幼いお孫さんも入れて)6人が、大倭墓地に分骨したいとのこと而来邑。あいにくの雨の中、墓前で午後2時から教長さんを祭主としてお参りしました。大倭会館に一泊。

11月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑倭の会。
11月14日 杉浩史さん(大阪府茨木市・78歳)帰幽……。預かっている原稿を後日また。
大倭安宿苑では

(菅原園)
10月26日(通所) 秋祭り開催。

10月31日 ハロウィンの催したこ焼きパーティー。
(須加宮祭)

10月13日 近くの出口商店へ徒歩で行き、それぞれお菓子等を購入しました。
(長曾根祭)

10月19日「デイサービスの運動会週間」とし、競技を楽しみながら身体を動かしました。
10月30日(特養) 順番にペランダで外気浴をするようにして木々の葉の色づきを鑑賞。

(茂毛路園)
11月2日 様々に自粛が続く折から、園の方に来て頂く理美容を再開しています。
(八重垣園)

通院以外の外出は控えている10月中旬、皆で付近の散歩に出かけました。

こぼれずみ

この折、散歩に参加していた今井久さん、職員さんから紹介された杉本順一さんが「あつ」と思いう出して、この写真を見せると、「これおやじや」と今井富蔵元大倭安宿苑苑長(前列右から4人目)を指さしたそうです。写真は、昭和43年

4月14、16日、カカサブ・カレルカル博士(中央)らインドのガンジー塾の一行を紫陽花邑に迎えた折のもの。

杉山龍丸さん(左から5人目)が一行を日本の各地に案内する途次、邑には2泊して、大倭神宮や垂仁天皇陵をめぐり大神神社参拝、赤膚焼窯元・大和文華館・墨の製造工場見学、東大寺大仏殿にも参拝、夜は瑞光院や交流の家で座談会など盛りだくさんのスケジュールを終え、次は法主さんも同行して伊勢神宮に向かいました。龍丸さんはいつもインドの人々に日本の神社の緑の杜を見せたそうです。
久さん(↓)は車の運転を頼まれていたとのこと。(春)



日聖祭(案内) 令和2年12月23日(水)

大倭七十七年 元日

法主日聖師の御誕生を記念する祭典

○午前10時、法主様の奥津城に参拝。
午前10時30分より大倭大本宮拝殿において日聖祭がとり行われます。

お願い

秋になってもコロナの勢いは衰えを見せてくれません。「3密」を避けるべく、9月の東光大祭の折と同様、皆様のご協力をどうぞよろしくお願い致します。

●恒例の直会演芸会も、今年は残念ながら中止とさせて頂くことになりました。(演芸会担当・中島武宣)

あんない

*金鶏祭(大倭神宮)
12月4日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

金鶏祭は(2月23日の申孝祭とともに)、登美と九州の両軍が戦いを止め「大和」を建国した精神を記念するお祭りです。『やわらぎの黙示』の「日本精神の源流―長曾根邑のすめらみこと」等を読んだり、聖歌「くにも」とを歌う時、改めて「和の光」に思いを致しましょう。

*月次祭(大倭神宮)
12月6日(日) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催祝会
12月13日(日) 午前9時より「掃除みそぎ」として、大倭紫陽花邑境内の大掃除です。昼食は用意されます。どうぞよろしくお願い致します。
これに先立ち8時より大倭墓地の大掃除が行われます。

*月次祭(大倭神宮)
12月15日(火) 午後2時より大倭神宮にて。

*日聖祭(大本宮拝殿)
12月23日(水) 大倭元日。
上の「案内」をご覧下さい。
*大倭神宮境内・周辺大掃除

12月27日(日) 午前9時より。有志の皆さんは参加下さい。昼食は用意されます。